

# 戦争・国家・スポーツ

——岡部平太の「転向」を通して——

高 嶋 航

【要約】 アジア太平洋戦争時期は日本のスポーツ界にとって受難の時代と記憶されている。しかしこれを中国大陸からながめると、全く違った様相が浮かび上がる。純粹スポーツの信奉者で、満洲にスポーツ王国を築いた岡部平太は、満洲事変にいち早く国家主義スポーツを提唱した。この「転向」は、日中両国の激しい抗争の場であった満洲の現実が醸成したもので、国策への便乗として片付けることはできない。その後岡部は天津で、軍特務としてスポーツを通じた文化工作を試みる。日中戦争勃発後、国家主義スポーツは日本の青年たちを戦場へと駆り立てた。一方、華北の占領地でスポーツは文化工作の一環として実施された。かくてスポーツは戦争の加害者となった。これは軍の強制によるというよりは、スポーツ界が戦争という状況に主体的に対応した結果であった。軍自身は武道・体操を重視し、スポーツを敵視する態度を取っており、そのため一方でスポーツ受難のイメージが形成され、他方で加害者としてのスポーツのイメージが隠蔽されたのである。

史林 九三卷一号 二〇一〇年一月

## はじめに

満洲事変からアジア太平洋戦争にいたる時期は「スポーツ受難」の時代として記憶されている。戦争という状況のもと、スポーツは社会に弊害をもたらすものとして敵視され、「国家の憎悪の対象」となり、様々な統制、弾圧を受けた。スポーツは戦争の被害者であったのであり、日本のスポーツ界が加害者としての意識を持つことは稀であった。しかしこう

した一般像には注釈が必要である。ここでいうスポーツとは、いわゆる「外来スポーツ」であって、武道や体操などは戦争に直接貢献するものと考えられていた。<sup>③</sup>また、スポーツ界は決してこうした状況を甘受したわけではなく、戦争を通じて積極的に自己正当化を図ろうとしていた。そればかりか、国外では、スポーツは文化工作の一翼を担い、日本軍の侵略に直接関与してさえたのである。本稿では、戦争とスポーツのこうした複雑な関係を、一人の人物の軌跡をたどりながら解きほぐしていきたい。

その人物とは、岡部平太である。岡部は明治二四（一八九二）年、福岡県糸島郡志摩村に生まれた。晩年の岡部に薫陶を受けた厨義弘の言葉を借りれば、岡部は「日本スポーツ界の鬼才、若き日講道館の風雲児と評され、剣道、庭球、相撲でも勇名を馳す。極東オリンピック、ボストンマラソン監督等を歴任し、歌人、文人としても著名であり、福岡県体育協会の創立、第三回国体誘致開催、平和台競技場建設の功労者・名付け親でもある」という人物であった。<sup>④</sup>このように興味深い人物ではあるが、日本のスポーツ界中央とことごとに対立した岡部はスポーツ史のなかで評価されることはあまりない。とくに満洲事変から敗戦に至る一五年間は、岡部を論じた研究にあつてさえ、ほぼ空白に等しい状態にある。<sup>⑤</sup>この間、岡部は大陸にあつていちはやく国家主義スポーツを提唱し、スポーツを国策へ奉仕させようとし、軍の特務として文化工作を主導していた。こうした経歴は岡部自身にとって、ひいては日本のスポーツ界にとつても、否定すべき過去として記憶され、語ることを封印されてきた。岡部自身も戦後は戦時中のことをほとんど語らなかつたという（厨義弘談）。戦前にスポーツの純粹性を唱えていた岡部が、どのような経緯で国家主義スポーツへと「転向」したのか。この経緯を解明することで、戦争とスポーツの関係を改めて考え直してみたい。

① 坂上康博「権力装置としてのスポーツ…帝國日本の国家戦略」講談社、一九九八年、二四四頁。

② 数少ない例外として、西尾達雄による告発（アジアに対する日本の戦争責任を問う民衆法廷準備会編『体育・スポーツにみる戦争責任』

植民地・朝鮮の体育政策』樹花舎、一九九五年）や入江克己の思想史研究（『日本ファシズム下の体育思想』不味堂出版、一九八六年）がある。ただしいずれも体育が中心である。

③ 「スポーツ」自体が西洋に近代的概念であることをさしおくとすれ

ば、「外来スポーツ」とは近代スポーツにほぼ等しい。近代スポーツの定義については、Allen Gutmann, *Games & Emphases: Modern Sports and Cultural Imperialism*, Columbia University Press: New York, 1994, pp. 2-3を参照。スポーツと体育の定義 およびその違いについては、様々な解釈が可能であるが、教育を主たる目的とするものを体育とし、娯楽を主たる目的とするものをスポーツとしておく。本稿でスポーツという場合、基本的には陸上競技、野球、サッカー等、

## 第一章 純粹スポーツの時代

### 第一節 スポーツの頂点をめざして

一九一七年六月、東京高等師範学校の研究科を修了した岡部はアメリカへと旅立つ。嘉納治五郎校長のすすめと、内田信也の資金援助をうけ、「武者修行者の気持ちで突嗟の間にアメリカ行を思ひ立つて」のことであった。<sup>①</sup> その二か月前、アメリカはドイツに宣戦布告し、第一次世界大戦に参戦していた。岡部が訪れたイリノイ州の大学では義勇兵募集のビラがあちこちに貼られ、総長は学生たちを戦場へ駆り立てる演説を行い、フットボールの選手たちはほとんどが陸海軍に志願していた。アメリカのスポーツ界は好戦的な愛国主義に満ちあふれていた。岡部はアメリカで「青年の純な心、人間性の美わしさ」をはぐくむスポーツの素晴らしさを実感したが、自分は軍国主義者ではないとして、その軍国主義的側面は評価しなかった。<sup>②</sup>

岡部はシカゴ大学、ペンシルヴァニア大学、ハーバード大学でスポーツの諸理論と実践を学んだ。アメリカで岡部に大きな影響を与えたのは、シカゴ大学のスタッグ博士 (Amos A. Stagg) であった。

アメリカのスポーツマンシップは勝てと教へる。この点が英国の伝統的精神とアメリカの精神の異なる処である。アメリカのス

勝敗を争うことを主とする競技を指し、ダンス、体操、武道などは含まない。

④ 厨義弘「日本スポーツ界の鬼才 岡部平太研究」『国際文化研究所論叢』第一四号、二〇〇三年八月。

⑤ 代表的なものとして、田中館哲彦「日本スポーツを救え…野人岡部平太のたたかい」平凡社、一九八八年、山口昌男「挫折」の昭和史」岩波書店、一九九五年、第四章などがある。

ポーツマンシップを日本の一部の人は極端に批難する。それはあまりに勝敗の観念が強過ぎるからである。……勝敗は元来スポーツ成立の必要なる条件であつてそれに夢中になるのはスポーツをやる以上当り前のことである。<sup>③</sup>

日本では勝敗よりもスポーツマンシップを重視するイギリス流のスポーツ観が主流であり、岡部は日本のスポーツ界において異端的存在とならざるをえない運命にあつた。岡部が陸上競技監督としてのぞんだ一九二七年の極東選手権競技大会（以下、極東大会）における陸上競技選手団退出劇はその最初の現れであつた。高師の先輩で、ともにスタッグに学んだ大谷武一（のちに日本の学校体育の中核を担う人物）は一九二八年に次のように言っている。「スポーツの生命は、ただ勝つことだけではない。勝とうとして努力するところにその真生命があるのだ。言葉を換えていうと、スポーツの生命は勝利にあらずして奮闘にある。真摯な努力に存する。」<sup>④</sup>ともにスタッグに師事した二人であるが、そのスポーツ観は全く異なつていたのである。

岡部は二年半の留学を終えて帰国した後、一九二二年四月、水戸高等学校に体育教師として赴任する。岡部はそこで「毎日、日が暮れて物が見えなくなるまで生徒と運動場にいた。」<sup>⑤</sup>それは岡部の師スタッグにならつたもので、コーチとして岡部の終生一貫した態度であつた。ところがわずか半年もたたずして岡部は水戸から姿を消し、密かに満洲へと渡つた。岡部が日本を離れた最大の原因はいわゆる「サンテル事件」にあつた。一九二〇年、講道館はサンテルというアメリカ人プロレスラーから挑戦を受けた。岡部はアマチュアリズムの立場からこうした試合が成立せず、またこれが嘉納の柔道の事業を崩壊させる危険性があると夜を徹して諫言したが、この試合が柔道の世界的発展に資すると考えていた嘉納を説得することができなかった。「これは私の生涯に於ける一番淋しい記憶の一つである。それは嘉納治五郎先生と先生の畢生の事業であつた柔道に関係した問題で全く意見が合わず、私は遂にそのまま先生の開運坂の邸を去」<sup>⑥</sup>つた。

岡部が逃避先として満洲を選んだのは、自らの「体育理念を実施できるところは、日本人の新天地、強大な満鉄王国を

おいてはほかにないと考えてのことであつた。」<sup>⑦</sup>高師時代の親友四角誠一が満鉄理事の大蔵公望や学務課長の保々隆に直

訴した結果、岡部は地方部学務課にポストを得ることができた<sup>⑧</sup>。岡部は持ち前の行動力を發揮して「早速満鉄の体育組織に一大斧鉞を加へると同時に全満洲の体育機関の組織的統一を絶叫され満洲各地を遊説して翌大正十一年に至りて満洲競技聯合なるものを組織」した<sup>⑨</sup>。全満洲競技連合会（のち「満洲体育協会」と改称）は設立直後の一九二二年八月末に全満洲水上選手権、さらに一〇月に陸上競技選手権を開催し、翌年の極東大会にはじめて満洲から日本代表選手を派遣した<sup>⑩</sup>。岡部は常務委員として満洲体育協会の中心的な役割を担い、満洲にスポーツ王国を築き上げた。満洲で岡部は「スポーツの神様」と呼ばれる存在となった<sup>⑪</sup>。

一九二八年九月、満鉄二十周年および天皇陛下御即位大典奉祝記念行事として、大連で日仏対抗陸上競技大会（以下、日仏対抗）が開催された。同年七月のアムステルダムオリンピックで織田幹雄が三段跳びで金メダルを獲得したとはいえ、岡部がこの大会を企画した段階では、日本の陸上界は世界的に見てまだ低い水準にあると考えられており、フランスに真っ向勝負を挑もうというのは破天荒な企画であった。しかし岡部は綿密な計算をもとに計画を立てていたのであり、日本軍は七八対七二で見事フランス軍に勝利した。岡部はこの大会について次のように言う。

私達は純潔な競技以外にあまり多くの事を考えたくはない。然し私達がこの競技を最も厳しく、また、フェアにやる事によって、よし日本が勝とうとも、日本が負けようとも、フランス青年の感情の琴線に、触れるものは必ず響き高き音であろうことを信ずる。……われわれは虚偽な国際信義や、誤られたる親善の虚偽な文字にわれわれのスポーツの純潔な殿堂を犯されたくはなかつた。むしろスポーツの殿堂を守る勇敢な騎士をもって、任じていたかつたのである。……日仏競技は、けつして国際親善の奴隸でもなければ、満鉄の営利政策の奴隸でもない。われわれの純情をこめたスポーツへの精進の第一歩である。私はスポーツは体育の奴隸でさえもないと堅く信じている<sup>⑫</sup>。

「虚偽な国際信義や、誤られたる親善の虚偽な文字」に彩られ、「スポーツの純潔な殿堂が犯され」た極東大会に比して、日仏対抗は政治や外交を超越し、スポーツが純粹な形で輝きを放った大会であった。それは純粹スポーツを追求していた

岡部にとってひとつの到達点であった。

## 第二節 中国へのまなざし

日仏対抗は岡部にとってひとつの転換点でもあった。岡部はながら満洲に身を置きつつも、その視線はつねに日本や欧米に向けられており、中国人との交流はほとんど眼中になかった。一九二八年六月張作霖爆殺事件のあと、東北保安総司令として満洲の政権を握った張学良は、スポーツの振興に力を注いでいた。日仏対抗の直後、張学良は同大会に参加した日本人選手を招いて国際選手歓迎運動大会を開催した。このとき張学良は岡部を私邸に招き、日中学生間のスポーツ交流をやりたいと提案した。<sup>⑮</sup> 岡部は張学良の呼びかけに積極的に応えた。翌年一月、東北大学のサッカー、バスケットボール選手一行が日本を訪れ、親善試合を行った。馬澤民は一行を代表して「日本のスポーツに親しく触れて教を乞ひ又日本の青年学生の美しい精神に接したい、そしてこのスポーツをとほして日支青年学生間の親善が達せられることを信ずるものである」と挨拶した。<sup>⑯</sup>

一九二九年五月二九日から奉天で第一四回華北運動会が開催された。大会の前日、岡部らが率いる在満日本人学校の選手団は張学良の私邸に招かれた。<sup>⑰</sup> 張学良は、中国と日本は離るべからざる関係にあり、無邪気で清浄無垢の精神をもち、政策的にも国際関係にも野心も悪心もたない両国の青年が交流を深めることの重要性を説いた。そうしてはじめて両国の「誤解」は解かれるのである。「玲珪<sup>マ</sup>たるヒューマニティ」に立脚した科学、教育、宗教、芸術は、外交上の「誤解」を超越しうるのであり、それを通じて両国の青年が相互に理解し合うことこそ、友好への筋道となるはずであった。岡部は次のように言う。

私達はスポーツに国境はないと信じている。ましてスポーツマンシップはちようと宗教がそうである様に、国境なく万人の心から心の琴線に触れ合うことの出来るものだという確信をもっている。<sup>⑱</sup>

また、師のスタッグに次のように書き送った。

フェアプレイの精神とよきスポーツマンシップを通じて、日本と中国を和解させること……私は偉大なスタッグの精神がこのことにおいても、根本的な役割を演じていることを嬉しく思います。<sup>①⑦</sup>

スタッグは「君は外交家や政治家がこれまでもたらした以上のことをなすとげるだろう」と答えて弟子の成長を喜んだ。スタッグの言葉が囂らずも示すように、純粹なスポーツは「外交家」や「政治家」以上の外交的、政治的作用をもたらしたのであり、けっして外交、政治を超越した存在ではなかった。

岡部がここで用いた「琴線」という言葉は、日仏対抗でも用いられていた。しかし、両者の間には大きな違いがある。フランス人とは対等な関係であったが、中国人との関係はそうではなかった。岡部にとつて、中国人はコーチとして指導の対象であった。中国が視野に入ること現実の政治的關係が持ちこまれ、スポーツの純粹性の意味は変容を蒙らざるをえなくなる。一九二九年一〇月に張学良の主催で開催された日独支競技会で、ドイツのデイム監督は次のような感想を語った。

歐洲文明の立場から見れば支那の文明に多少の見劣りを感じるやうに運動競技でも歐洲のそれに比べて矢はり見劣りがあつた……日本選手に就ては競技会を開く毎にたゞ驚きを増すばかりです。<sup>①⑧</sup>

日本とヨーロッパとの關係は、日本と中国との關係と同じではありえなかつた。「日独支競技会」で張学良代理の劉風竹は「自分達は政治的には何等關係なく真のスポーツマンとして國際親善を図りたいと思ふ」と挨拶した。<sup>①⑨</sup> スポーツを通じて國際親善とは、現実の政治的問題に目をつぶることで実現するものであり、いったん政治が持ちこまれればスポーツは無力であつた。この矛盾が、やがて岡部の純粹スポーツ信仰を突き崩すことになるのである。

岡部は「父の喪に服する張学良氏を想いて」と題する短歌を詠んでいる。<sup>②①</sup>

今宵はも月の暗きに学良は男心に泣きてやあらん

日本に対する個人的な恨みをみせることなく、スポーツによる日中交流を進めていた張学良に対する敬意が溢れた一句である。しかし同時に岡部はスポーツをもつてしても変えることのできない強烈な感情に気づいたであろう。張学良は自身が校長をつとめる東北大学のコーチにはドイツ人を招聘し、体育系主任にはアメリカ留学経験のある郝更生を抜擢し、決して日本人に頼ろうとはしなかったのである。

張学良にもまして、人間性という面で岡部をつよく魅了したのは馮庸であった。馮庸は軍閥馮德麟の長子で、張学良と同年代であり、ともに一九二〇年に東北陸軍講武堂を卒業した。東北軍少将参謀、東北航空処上校参贊を歴任し、一九二五年に東北空軍少将司令官となるが、一九二六年に馮德麟が病死すると、馮庸は父の遺産をつぎ込んで馮庸大学を設立し、教育界に身を投じた。馮庸は一九二九年一月に刊行された『馮庸大学校刊』創刊号の冒頭で、その教育方針を次のように説明する。

本校の教育は、国の威信を發揚し、社会を改造することを使命とする。かたや自ら徳、体、智の三育の実践を求め、かたや軍國民教育を実施して、徳貞学純、忠勇壮烈なる青年を養成し、救国の事業に従事させることを望む。品行を重んじ、試験を嚴格にし、運動を強制するだけでなく、学生の生活を完全に規律化して、軍事教育の眞精神に合わせ<sup>20</sup>。

馮庸が軍事教育を強調したのは、中国の国際的自由と独立、国内の安寧と平和を達成するには軍事力によるほかないという認識があったからである。馮庸が仮想敵としていたのは、いうまでもなく日本である。一九二八年五月の濟南事変、翌月の張作霖爆殺を契機として中国の対日感情は悪化し、その影響はスポーツ界にも及んだ。『馮庸大学校刊』の「体育消息」には、北平で国際テニス大会を開催しようとしたところ中国人チームが濟南事変に抗議して日本人との試合を拒否した、帝国大学蹴球部が上海に遠征したところ交通大学は試合を拒否しようとしている、大連で日本人が昭和天皇即位記念の国際運動会を開こうとしたが中国の体育団体は慶祝の意義を認めず参加を拒絶した等の記事が掲載されている<sup>21</sup>。こうした状況を考えると、一九二八年九月に張学良が岡部にスポーツを通じた提携を呼びかけたことが、どれほど重大な意義を

もっていたかが知れよう。

一九二九年五月、張学良との会見の数日前、岡部は馮庸大学へ陸上競技のコーチにいった。

設立者にして学長である馮庸氏は年齢僅かに二十九歳、さつ爽たる元氣がある。「僕は運動場にいる時が一番愉快です」と初対面の挨拶をやると「君の様子を見るとすぐわかるが自分もそうだ」といって真赤なスエーターに汗を拭き拭きの話である。<sup>②③</sup>

岡部も馮庸もつねにグラウンドに立ち、現役の選手としても活躍した。<sup>②④</sup>互いに相通じるものを感じたとしても不思議ではない。これ以後、二人の親交は深まり、岡部はコーチのためたびたび馮庸大学を訪れ、馮庸大学は日本とのスポーツ交流に積極的となる。同年夏に中東鉄道をめぐって中ソ関係が悪化したことも、追い風となった。当面の敵としてソ連が急浮上したからである。馮庸は義勇軍を組織して、前線へ赴き、ソ連を牽制した。

岡部は愛国主義者馮庸との交流が危険を伴うことを十分に承知していた。岡部は知人に対して、「こんなに支那人の中に深入りしていると、いつか俺は殺されるだろう」と漏らしていた。<sup>②⑤</sup>それでも彼が日中交流に尽力したのは、「自分の考へではあの排日の盛んな時よし一つの支那側の大学にでも吾々日本人の持つ眞精神を徹底指す<sup>マツ</sup>ことが出来たら自分の力としてはそれで十分だと思つてやつて来た」からであった。<sup>②⑥</sup>岡部はすでにスポーツの政治性を十分に認識していた。そしてこの時の経験がのちの文化工作で生かされることになる。

### 第三節 スポーツ観の変化

「スポーツは体育の奴隷でさえもない」と言つてスポーツと体育を峻別した岡部であったが、学校体育に関係するなかで、スポーツと体育の距離は狭まつていった。一九二二年一月、関東庁と満鉄の合同で南満州教育会教科書編輯部が設立された。前年一〇月に入社したばかりの岡部は、牧信立とともに公学堂用体操教科書の調査員に任命された。<sup>②⑦</sup>その成果である『満洲体育教授参考書』は一九二六年に完成した。この参考書は一九一三年の学校体操教授要目を基礎に、最新の

成果を導入し、満洲の環境に適合するよう改訂したものである。このうち「第三編 競技教材解説」は岡部の考え方が色濃く反映されている。

競技であるから勿論他より勝たねばならぬ。（運動だから勝負は度外視してやるといふ者が多くあるけれ共、それは競技そのものの、本質からいつて考へが間違つてゐる。又そのやうな遊戯気分をやつてはならぬ、競技と遊戯とは全然ちがふものである）然し「勝つ為に手段を選ばず」といふやうな態度に出でてはならぬ。あく迄も正々堂々の陣を張り、己れのベストを尽して天命を待つといふ気概がなければならぬ。

満洲の体育教育には（兵式）体操や軍事教練を重んじる軍国主義的傾向と、それに反対する「自由主義体育」を信奉する人びとがいた。<sup>②③</sup> 岡部の言葉では「体操を主とした傾向」と「スポーツを以て体操に代へる」という二派の対立であった。岡部は当然スポーツ派であり、視学委員という立場から学校体育に影響力を行使した。一九三〇年七月、大森吉五郎が満鉄地方部長に着任すると、満洲の学校体育界の勢力図に大きな変動が生じる。陸上競技に関して次のような記述がある。

大森理事が地方部長として就任され、昭和五年に沿線学校の状況を視察したところ、児童生徒の体育上樂觀すべき情態ではないといふので、この盛大な陸上競技が潰える原因となり、また遠藤繁清博士が文部省発表の統計に基き選手の健康が面白くないといふやうな理由から、教育界の陸上競技に対する動揺となり、遂には陸上競技絶滅の姿とはなつた。<sup>④</sup>

翌年二月に児童生徒保健調査会が組織され、「我が満洲独特なる体育理論に基く体育系統を確立すること」が決議された。三月に最初の委員会が開かれたが、最大の課題は小学校における対校競技の存続の可否であった。結局、対校競技は廃止せずに改善すること、学校体育の現場では「スポーツ」「競技」にかえて「体育運動」という言葉を用いることが決められた。岡部はもちろん委員として出席していたが、一年半前にスポーツは体育の奴隷でさえないと断言していた岡部が、どうしてこの決定を支持したのだろうか。

当時、スポーツと体育の關係に大きな変化が生じていた。

Athletics for all」といふ標語をか、げてエル大学の有名なコーチ、オルター、キヤムプ〔Walter Camp〕が民衆的に打つて出たのは十年も前のことである、それ以来この言葉は体育界でも、スポーツ界でも殆んど共通の通用語となつて居る。

スポーツは元来から云つて体育をその目的の中に含んで居るとは云ひ得ない。たゞ近代的な世界的風潮である体育思想とスポーツ及びアスレティックスの思想とが最近完全に一致したが為め、有らゆるスポーツは体育論を振り翳した体育論はスポーツをもつてその内容とするに到つてしまつた……。

満洲でも『満洲日報』が社説でスポーツの大衆化を呼びかけていた。

今日は一切のものが「民衆」自身のものとなり「民衆」自身が能動的に働きかける傾向を特徴とする大衆化時代だと呼ばれてゐる。……スポーツは未だ真に大衆のものとなつてゐない……スポーツ自体が大衆の中に入り込み、大衆のものとなることが要求されるときに、大衆自らスポーツを實踐し、その主人とならねばならぬ、そして初めてスポーツは選手の單なる演技であることから解放されると共に、全体としての大衆の体育の向上と發展があり得やう。

一九三〇年五月、東京で行われた極東大会にコーチとして参加した岡部は、文部省主催の全国体育主事會議に出席し、大衆体育の必要性を力説した<sup>⑤</sup>。また同時に政府委員に対して次のような質問をなげかけた。「体育が單なるスポーツというのではなく、真の社会体育として行われる場合、それが強いナショナルリズムに依ることなく、普遍性ある体育手段ありや？その方法及び国名？」この言葉は、体育Ⅱスポーツに対する岡部の迷いのあらわれでもあつた。純粹なスポーツはナショナルリズムを超越する。しかし体育はナショナルリズムに支えられている。排日感情の強い満洲で、日中間の対立を煽ることなく体育Ⅱスポーツを實踐することはいかにして可能なのか。そもそも体育Ⅱスポーツによる日中間の対話は可能なのか。

① 岡部平太「スポーツ行脚」日本評論社、一九三二年、五一―六頁。

② 岡部平太「最近の競技思潮（上）」『福岡日日新聞』一九三二年一月

三日。

③ 「スポーツ行脚」二八三頁。

- ④ 大谷武一「フェアプレーの危機」（山本義男）『ある体育人の生涯——大谷武一小伝』タイムス刊、一九七九年、二二〇頁。
- ⑤ 岡部平太「ゴーチ五〇年」大修館書店、一九六〇年、二二七頁。
- ⑥ 岡部平太「スポーツと禪の話」不昧堂書店、一九五七年、二八一頁。
- ⑦ 岡部平太「スポーツ・勝負・人間・岡部平太遺稿集」同書刊行会、一九六八年、三三二頁。
- ⑧ 「日本スポーツを救え」七〇一七頁。
- ⑨ 高橋俊夫「関東州体協の強化を望む（上）」『満洲日日新聞』一九三九年六月三日。
- ⑩ 「満洲日日新聞」一九三二年七月二〇日、九月一日。
- ⑪ 「滿蒙日本人紳士録」満洲日報社、一九二九年。
- ⑫ 「スポーツ・勝負・人間」三七—三八頁。
- ⑬ 「スポーツ・勝負・人間」二一八頁。
- ⑭ 「東京朝日新聞」一九二九年一月二四日。岡部は付添という形で一行を率いた。
- ⑮ 岡部と張学良の会談については『満洲日報』一九二九年五月二十九日、「スポーツ・勝負・人間」五一—五五頁を参照。
- ⑯ 「スポーツ・勝負・人間」五三頁。
- ⑰ Gerald R. Gems, *The Athletic Crusade Sport and American Cultural Imperialism*, University of Nebraska Press, Lincoln and London, 2006, p.41.
- ⑱ 「満洲日報」一九二九年一〇月二日。デイムは一九三六年のベルリンオリンピックで組織委員会の事務総長をつとめることになる。
- ⑲ 「満洲日報」一九二九年一〇月二日。
- ⑳ 「スポーツ・勝負・人間」五五頁。
- ㉑ 馮庸「我之所以實施軍事教育者」『馮庸大学校刊』第一期、一九二九年一月。
- ㉒ 交通大学足球部は一九二八年一月に日本へ遠征し、一月二日に帝國大学と対戦して二対一で勝っている。
- ㉓ 「スポーツ・勝負・人間」五四頁。
- ㉔ 「満洲日報」一九三〇年四月一六日。
- ㉕ 宮畑虎彦「岡部さん——その片鱗」（『スポーツ・勝負・人間』三四—三五頁）。
- ㉖ 「満洲日報」一九三三年一月二日。
- ㉗ 竹中憲一「満洲」における教育の基礎的研究』第二卷、柏書房、二〇〇〇年、二〇二頁、同書第三卷、三二七、三三三頁。なお同年五月二七日に文部省訓令第二号で学校体操教授要目が改訂され、スポーツがはじめて教材に取り込まれた。
- ㉘ 南満州教育会教科書編輯部『満洲体育教授参考書』上巻（稿本）、一九三四年、編者刊、二二八頁（竹中憲一編『満洲』植民地中國人用教科書集成』六、緑蔭書房、二〇〇五年、二六三頁）。同書下巻は一九二六年九月二八日に発行であるから、上巻も一九二六年には完成していたと思われる。牧は札幌師範学校教諭をしていた一九一九年に『小学校ニ於ケル体操ノ理論及實際』を刊行しているが、勝負云々に類する記述は見られない。
- ㉙ 「満洲」における教育の基礎的研究』第二卷、二〇二—二〇三頁。
- ㉚ 「満洲日報」一九三三年三月二九日。
- ㉛ 南満州鉄道株式会社地方部残務整理委員会『満鉄附属地経営沿革全史』龍溪書舎、一九七七年、六七—一六七頁。
- ㉜ 岡部平太「体育とスポーツの一致 体育ボール時代出現の趨向（下）」『満洲日報』一九三〇年八月三日。
- ㉝ 岡部平太「体育とスポーツの一致 体育ボール時代出現の趨向（上）」『満洲日報』一九三〇年八月三日。
- ㉞ 「体育の大衆化に就て」『満洲日報』一九三〇年四月九日。

## 第二章 国家主義スポーツの時代

### 第一節 満洲事変と満洲国参加問題

一九三一年九月一日、満洲事変が勃発、関東軍は瞬く間に奉天を占領した。馮庸大学も関東軍に占拠され、校長の馮庸は軟禁された。岡部は馮庸との「友情忍び難く」、関東軍高級参謀板垣征四郎大佐にあつて事情をきき、憲兵隊司令部にかけつけて二宮健市大佐を説得、馮の保釈に成功した。<sup>①</sup>馮庸はしばらく岡部宅にいたが、本人の希望で欧米諸国の視察に出かけることになった。馮庸はまず東京へ向かうはずであつたが、その途中上海に寄港した際、南京に蒋介石を訪れて「憂心」した。<sup>②</sup>『申報』によれば、一〇月二七日に馮庸は南京に着いて蒋介石と会談、翌日に飛行機で北平入りし、一月三日に蒋介石、汪精衛、胡漢民らに南京、広東間の和平促進をうったえる電報を發し、七日に六百名あまりの東北民衆救国請願団を引きつれて上海入りした。<sup>③</sup>馮庸の「憂心」により、岡部は関東軍に逮捕される。その時期は定かではないが、「満洲事変機密政略日誌」の一月一七日条に「本日片倉参謀は板垣参謀の同意を得て岡部を招致し之を面詰し相当の慰籍をなすべきを要求し併せて馮庸の脱出問題を難詰し其回答を保留せしめたり」と、拘留中の岡部の状況を伝える記事があるから、一〇月末から一月中旬の間であつたと考えられる。家族と水盃を交わして出頭した岡部は処刑を覚悟していた。岡部の逮捕を知った満鉄関係者、スポーツ関係者らが助命に奔走した結果、岡部は銃殺を免れた。岡部は一二月末に上京して文部省、高等師範学校等をまわつて事情を報告、その後大連に戻つた。岡部はこの件について「自分が馮をあまり過信した不明の罪でその重大な過失の責任に対しては自分は弁護の余地もない」と反省の弁を發表している。売国奴呼ばわりされ、満鉄から、そして国家から見放された岡部は、これまでいかに特権的環境のなかでスポーツを追求していた

のかを思い知ったであろう。岡部と馮庸の友情は戦争の前に無力であり、スポーツを通じて結びついた二人はそれぞれの国家へ引き戻されていった。しかし二人の友情は途切れることはなかった。一九四七年、帰農していた岡部のもとに馮庸からの手紙が舞い込んできたからである。<sup>⑤</sup> 岡部が馮庸を許したのは、馮が岡部と同じように自らの国のために尽くしたことを理解していたからであろう。スポーツが国家に奉仕するものである以上、それは当然のことであった。

その後岡部は満鉄の退職金を利用して、エビの貿易に手を染めたが失敗、ついで靴屋を開業した。<sup>⑥</sup> 『読売新聞』一九三二年二月一六日に靴屋となった岡部が紹介されている。

満洲にその人ありといはれた岡部平太君、例の満洲事変以来気の毒にもトンダ噂をたてられて以来、満鉄も辞めてスツカリ腐つてしまつたと思つたらどうしていつの間にか靴屋になつてゐる。……「君、俺の師事するスタック（シカゴの名コーチ）の親父も靴屋だつたんだぜ、スタックは曰く親父は靴を作ることによつて自分の人格を叩き上げたので、自分が人格者だと人からいはれるのは全く靴から生まれたのだ、といふのだ。だから俺も一生懸命靴を作つて人格を作るつもりだ」と。

一九三四年正月、岡部は「『満洲体育』改造論」を発表した。<sup>⑦</sup> 満洲事変以後にはじめて自らの体育・スポーツ観を語つたこの文章で、岡部は「凡そ体育を以て一国の政策に利用することは近代国家の為政者達が等しく採つて居る政策であり、適当な手段だとも思ふ」とのべ、国家主義的体育を主張した。同月末、岡部は満洲陸上競技革新連盟を組織して、極東大会への満洲国参加問題に関与を深めていく。<sup>⑧</sup>

二月九日、満洲国体育協会内に国際競技準備委員会が組織され、翌日、大日本体育協会に対して満洲国の極東大会正式参加をあらためて要請した。同委員会には陪席委員として八名の軍人が名を連ねており、この動きが関東軍の支持を得たものであったことがわかる。<sup>⑨</sup> 一方、満洲体育協会でも一三日に緊急理事会をひらき、満洲国が参加できない場合は満洲から日本人選手を派遣しないという姿勢を示した。<sup>⑩</sup> 両者の反応を確かめた満洲陸上競技革新連盟は一四日に理事会を開催、岡部を東京へ派遣することになった。岡部は「極東大会がこんな形になりはしないかといふことはジュネーヴ脱退当時私

共の懸案でした……運動界廓清大亜細亞民族結合のために大いにやつて参ります、恐らく日本運動界が政治外交の問題としてスポーツを取扱ふのは今回が初めてだらうと思ひますが」という言葉を残して日本へ向かった。<sup>⑩</sup>二〇日に東京で結成された国際競技準備委員会東京委員会は大橋忠一を委員長とし、委員には岡部のほか、山口一太郎や今田新太郎ら軍人も含まれていた。<sup>⑪</sup>岡部はこうした関係を利用して、中野正剛ら政治家、軍関係者、右翼団体などと接触し、世論を喚起するため奔走した。三月一日の理事会で大日本体育協会は、三国協議会開催を実現すべくフィリピンと中国に山本忠興を派遣することを決定、一応の目的を果たした岡部は一旦帰国の途につく。<sup>⑫</sup>

この間、岡部は「満洲国の極東大会参加真相」なる文章を発表する。オリンピックには独立国ではないカナダやフィリピンもネーションとしての待遇を受け、極東大会でも仏印と蘭印の参加が認められているから、満洲国の参加を拒む根拠はない。日本側が恐れるのは、極東大会から脱退すれば、国際オリンピックからも脱退しなければならなくなるという点で、実際大日本体育協合理事の一人は「満洲国は吾々日本のスポーツ界に対して抱き合ひ心中を迫るのか」と食ってかかってきた。日本はすでにジュネーブで満洲国と抱合心中しており、「最後の時が来たら、国際オリンピックであらうが、デビスカップであらうが潔く脱退して、厳然たる孤立日本の姿を正視する迄だ。」岡部はこのように、オリンピックに未練を残し、断固たる態度に出ない日本のスポーツ界首脳部を批判した。<sup>⑬</sup>

一方日本側は、岡部が東京で政治家と接触したことについて、スポーツを政争の具にするものだとして批判した。これに対して岡部は、スポーツ界ではどうにもならないから、最初から政治問題化するつもりでやってきたと反論し、逆に日本スポーツ界にはびこる自由主義を清算せよと主張した。日本の名譽、スポーツの精神をまもるためには国民外交の尖端に立つことも必要である。こうした問題を考慮せずに参加すれば、「モダンボーイの暇つぶしの享樂」といわれても返す言葉もないし、ダンスの世界選手権に行く選手とちがいはないのである。岡部にとって、もはやスポーツはそれ自身で正当化されるものではなくなっていた。

『競技と体育』一九三四年八月号に発表された「俊英出でよ！」は満洲事変後に岡部が日本のスポーツ雑誌に寄せた最初の文章で、ここでも日本のスポーツに対する深い憂慮が示されている。一九三〇年の全国体育主事会議で岡部は、「強いナショナルリズムに依ることなく、普遍性ある体育手段ありや？その方法及び国名？」という質問をした。しかし、「時代はその後五年間に一大転換をやった。」いまやオリンピックや英米の観念的アマチュアリズムをすて、国家の統制の下に、国民精神が打ち込まれた体育・スポーツを推進しなければならない、と。スポーツがナショナルリズムに依ることは当然の前提となった。こうして岡部と日本スポーツ界との対立軸は、英国的スポーツ対米国的スポーツから、英米的自由主義スポーツ対国家主義スポーツへと移行したのである。

大石峯雄は一九三四年の体育思想界を概括する文章で、この年の体育思想の特徴の第一として「個人的自由主義的体育より、民族的国家的社会的体育への転換」を挙げ、外国ではナチスドイツの体育を、日本では岡部と竹内一の文章を取り上げている。大石によれば、日本の体育機構はリベリズムの下に構成されてきたが、それは国家の安全が保証されていたからであって、非常時には体育もまたそれに対応したものが求められることになる。大石は岡部が否定したアマチュアリズムというのは、実はリベリズム個人主義のことであると指摘したうえで、その方向性に賛意を示した。満洲事変後、日本が国際的に孤立を深めつつあるなかで、日本のスポーツ界はますますオリンピック（が体现する国際主義）へ傾斜していた。そんななかにあつて、岡部の主張はひときわ目立つものであり、大石が岡部の文章を取り上げたのもその先見性ゆえであつた。

## 第二節 文化工作としてのスポーツ

満洲国参加問題が一段落すると、岡部はふたたび靴屋家業に戻ったが、今回の「活躍」を買われたのか、七月一日付で満洲国文教部より満洲国体育協会囑託を委嘱された。一方、全日本陸上競技連盟は七月一八日に岡部平太の評議員罷免を

決定した。理由は極東大会に際して「連盟役員として内部統制を紊した」からであった。<sup>⑮</sup>一九三五年二月一六日、「読売新聞」で岡部が関東軍司令部嘱託として山海関特務機関に配属となったことが報じられた。<sup>⑯</sup>当時日本軍は華北五省分離工作を進めていたが、南京政府による幣制改革実施を受け、土肥原賢二の主導下で一月二五日に冀東防共自治委員会を発足させた。これに先だつて山海関特務機関は非武装地帯各県に日本人顧問を送り込み、自治政権樹立への布石とした。<sup>⑰</sup>灤県に顧問として送り込まれた中下魁平は、満洲国治安部で冀東問題に参画していた東亜同文書院の先輩鷲崎研太の推薦を受け、顧問の一人に選ばれた。このときの試験官は竹下義晴大佐、田中隆吉中佐、今田新太郎少佐だったという。岡部がこの工作に参加した背景には、今田新太郎の推薦があつたと考えられる。<sup>⑱</sup>

岡部は天津で、「冀東自治政府二十二県の政務長官見た様な行政的立場」にあつた。しかし二月半たつて岡部は、「もつて生れた闘志は此処でもなか／＼じつとして居れず或は只今シヨウケツを極めて居る学生排日思想の爆破工作に転ずるかも知れません」と転職を示唆する手紙を親友に送つた。<sup>⑲</sup>そして実際、一九三七年二月に「支那駐屯軍司令部勤務として、主として北支方面の青年学生思想の動きに関する任務を担当」することになる。<sup>⑳</sup>岡部は自らの抱負を次のように説明した。御承知の如き支那全般の対日感情に直面し乍ら文化的事業を建設することの困難は、實際局に当り直面するものに有ざる限り理會し能はざるものに御座候。幸ひ學生スポーツ各般に亘り専門的知識経験を有し候為、現在に於ては主力をその方に注ぎ、運動に於ける接触提携を企て居り候処、案外摩擦少く、種々の進展状態を呈し居り候。<sup>㉑</sup>

岡部は満洲での経験から、中国のナシヨナリズムがいかに根強いものか、そしてそれが日本の大陸進出にどれほど大きな障害をもたらすかをはっきりと認識していた。と同時に、スポーツによる交流が多少なりとも、このナシヨナリズムを緩和する力があることも感じ取つていた。岡部は持ち前の行動力を生かして、すでに前年の三月に輔仁大学の蹴球・籠球部をつれて日本遠征を行つていた。その結果、「帰国後彼等の対日感情は相当の変化を来し、昨年六月の北平学生デモには全校秘密裡に会合致し不参加を決義」するという成果が得られた。一九三七年春、今度は北寧鉄路体育会足球队を率いて

日本遠征を行うべく、外務省文化事業部長岡田兼一に対して協力を要請するべく書簡を送り、そのなかで文化工作としてのスポーツの重要性を次のように訴えた。

大体現在の対支政策に於て経済提携と云ふ声は大にして人々の関心を得居り候へ共、文化的提携交渉は更に先行すべきに關らず殆んど触手を断ち居る状態にして痛憤致し居り候次第に御座候、往年仏、独、英、米が支那に進出したる歴史を検討するに宗教を以て先駆とし宗教家も亦国家の意図を吸みてよく国家的前進の旗手と相成り今日の経済的地盤を確立致し候。今日日本の宗教家にその迫力なければ愚生はスポーツを以て彼等宗教家の如く真正面より接触打壊を考へ居る次第に御座候。

岡部は自らの役割を帝国主義の先兵としての宣教師に重ね合わせた。宣教師たちが戦争と信仰のあいだに矛盾を感じなかつたように、岡部もまた中国侵略の道具として（ただし、岡部の意識としては、国家の発展のために）スポーツを活用することに躊躇しなかつた。岡部はひき続いて東京オリンピックに言及し、中国は否応なく選手を派遣するだろうから、いままが「文化的工作として我方の最も積極的態度に出すべき絶好の時期」だと強調した。

日中戦争の勃発は、日「中」間のスポーツ交流を拡大させるまたとない機会となつた。一九三八年一月、岡部は『読売新聞』に論説を発表し、「支那の沢山のスポーツマン達は、新しい政治情勢のもとに、如何に明朗な日支乃至日滿のスポーツを期待してあるかわからない。そのきつかけをつけてやるのは新しい日本スポーツ界の重大な使命ではあるまいか」と日本のスポーツ界に呼びかけた。天津では二月に、岡部が顧問をしていた教育局を中心に、体育協会が組織された。新民会天津指導部でも体育会が組織され、安田光昭主事が体育事業を推進した。安田の最初の仕事は「抗日排日意識に燃えるスポーツ文化界の諸分子を、租界の壁から誘い出すこと」で、当初は投石をされるなど苦勞したが、徐々に交歓競技会の開催にも応じてもらえるようになった。岡部は「中国」チームを東京オリンピックに参加させようと考え、天津を中心に全国的な体育協会結成の準備を進めていた。しかし、思わぬ形で東京オリンピックに關与することになった。

早くも一九三七年の陸連総会で岡部を東京オリンピックの日本陸上競技代表のコーチに迎えようという話が出ていた。

「岡部平太氏は人も知る前回の極東大会問題で、日本のスポーツ界の上層部と深刻な闘争を行ひ、陸連からも閉め出しを喰つた筈の人であつた。……闘争の方針が、仮りに常道を踏み外して居ても、同氏の取つたものはスポーツの動向を国策的のラインに添はせ様としたものであつたからだ。……日本のスポーツの運営と方向は同氏の喝破した如く進行し」た。<sup>③</sup>日中戦争後、日本スポーツ界の雰囲気は一変し、もはやスポーツが政治を超越すべきだなどと声高に叫ぶことはできなくなつていた。さらに、オリンピックの強化方針に関する陸連内部の抗争も岡部の就任を後押ししたようである。

六月、前月に亡くなつた嘉納治五郎の墓参を兼ねて、岡部はオリンピックの準備のために帰国した。陸連から役員を引きあげた早稲田・慶応の代表は川本信正を派遣して岡部にコーチ就任を依頼、岡部は野口源三郎のアシスタントコーチとしてならという条件で了承した。<sup>④</sup>ようやく軌道に乗りかけた華北での事業を擲つて、あれほど敬遠していた日本スポーツ界の中樞に乗り込むことを決意したのは何故か。岡部いわく、「自分は、元來日本陸上界には国内的、或は個人的に恩讐両方とも、相当深い関係があるのでしたが、そんなことに関係なく、とにかく日本が負けるといふことは僕には堪えられないことだし、これは一つ一つ身を挺しても、この間に立つべしと考へて見たいのです。」<sup>⑤</sup>日本の陸上陣はベルリンで華々しい活躍をしたが、そのわずか二年後、一部の関係者が今度は一点もとれないのではないかと心配するほどの事態に陥つていた。<sup>⑥</sup>勝負師として、また愛国者としての岡部にとって、それを座視するわけにはいかなかったのである。

岡部は天津に戻り、身辺を整理した上で、七月九日に天津を出発、大連に立ち寄つた。おりしも大連では日滿對抗競技が開かれており、岡部は競技を観戦し、そのまま日滿選手団一行とともに新京へ向かつた。この間に東京オリンピックの開催権返上が決定した。岡部はこの知らせを新京で石原莞爾から聞かされたともいい、あるいは奉天まで来て報道に接したともいう。<sup>⑦</sup>いずれにせよ、天津を引き払つた以上、ひとまず東京へ行くしかなかつたが、それは「ちようど鬼が浄土に來た様な具合」であつた。東京では毎日文藝春秋社へいつて佐々木茂索や菊池寛と将棋をうつていたが、そのうち菊池や久米正雄らが漢口戦線にいくと力みだしたことから、岡部もようやく重い腰を上げた。<sup>⑧</sup>本人の言では「僕は支那問題の収

拾に対してはたった一つ点火した爆弾の様な考えを抱いています。自分ではこれ一つ、ただこれ一つに限るといふ信念を抱いているのです。それが容れられる処がないならば上海、漢口の第一線の小銃弾のパチパチやるところまで出る考えで飛び出したのです。」岡部は九月一〇日に東京を出て、天津に立ち寄り、大迫機関に身を寄せた。<sup>⑤</sup>大迫通貞は満洲事変時の吉林特務機関長で、一九三八年当時は大本営付陸軍少将として、上海の土肥原の指示により呉佩孚工作を担当していた。<sup>⑥</sup>ついで立ち寄った北京で、「或る偉い人に会って見たら盛んに北京にいることをすすめられ、とうとうその日の中に話がきまり、大いにやることを誓ってしまった。」この「偉い人」とは中江丑吉（中江兆民の長男）であった。<sup>⑦</sup>中江は日本の必敗を確信する「開明的敗戦主義」者で、「北京の城壁にへばりついて聖戦を白眼視する非国民的なスネモノ」として憲兵からマークされる存在であった。しかし彼の交遊範囲は広く、今田新太郎をはじめ日本軍の将校にも多くの知己がいた。中江は岡部の「無邪気な面」が気に入った。中江は誰にも自分のことを先生と呼ばせなかったが、岡部だけは例外であった。<sup>⑧</sup>岡部の中江に対する態度は崇拜に近いものがあり、病床の中江を最後まで精神的に、そして経済的に支えた。

その一週間に一晩だけは「毎週土曜日に中江宅に弟子たちが呼ばれて雑談した」、魂（たましい）全部が洗い清められたのですがしきで、一里近い夜の北京の街を歩いて、<sup>⑨</sup>西单の辛寺胡同の院裏まで車にも乗らず少年の様な浮々とした気持で帰ることができた。中江先生が生きておられる限り自分では北京を去らないと心にきめていた。<sup>⑩</sup>

かくて偶然の成り行きから、岡部は再び華北でのスポーツ事業にとりくむこととなった。岡部は挨拶状のなかで次のようにその経過を説明した。

その後、国民体育の諸問題、スポーツ行政機構の改革、武道の刷新等に関し懐抱する意見も多少有之候しも、全時局を大觀致し、大陸作戦の一部に直接参画することを以てこの際に於ける小生の本務なりと考へ、九月中旬渡支再び軍務に精勵致すことと相成申候。<sup>⑪</sup>

### 第三節 占領地スポーツの理想と現実

東京オリンピックが幻と消え、目標を失った日本スポーツ界は、次なる事業として、日本、満洲国、「中華」三国による国際競技会を計画し、一九三九年九月に日滿華交驪競技大会が開催されることになった。<sup>⑧</sup>北京では四月一日に「国際田徑訓練班」が立ち上げられ、大会に向けてのトレーニングが始まった。二月に国立師範学院体育史教授に就任した岡部は、この訓練班のボランティアコーチをつとめることになった。<sup>⑨</sup>しばらくして岡部は中国代表の総監督就任を要請される。

このたびの中日滿運動會華北代表隊はもともと中国人の団体であり、わたしは最初監督になるつもりはなかった。いま望んで監督となつたのは、二つの理由がある。一、私は中国、日本、滿洲三国の体育界の状況に最も通じている。二、今回の大会の目的は、東亜新秩序を建設し、中日滿の青年が手を取り合うのを促すことにある。<sup>⑩</sup>

六月末、大日本体育協会との打ち合わせのために帰国する途中、岡部は新聞記者に次のように語った。「われ／＼の方針は原則として北支青年のみでチームを組織してゆかうといふので在北支の日本人のスポーツは又別個に考へてゐるところに或る意義を感じてゐる。」<sup>⑪</sup>岡部の発言が、「多民族」を売り物にする滿洲国チームを念頭に置いたものであることはいうまでもない。岡部は日本人選手（その多くはかつて日本の大学で活躍した選手）に牛耳られている滿洲国のスポーツ界に批判的だつた。東亜新秩序への期待や滿洲国への批判には石原莞爾の影響が見て取れる。岡部と石原の関係がいつごろ始まつたかは定かではないが、岡部が自分を指導感化した人物として禅の師匠である大休老師、スタッグ博士、中江丑吉と石原莞爾の四人を挙げていることから、その影響の大きさを窺うことができよう。<sup>⑫</sup>岡部は北京に戻る前、舞鶴に石原を訪ねた。石原の日記には岡部が「大迫氏ノ使トシテ」来たと記されている。<sup>⑬</sup>

一九三九年九月一日、ヨーロッパで戦線の火ぶたが切られたその日、滿洲国の国都新京で日滿華交驪競技大会が開催さ

れた。大会終了後、岡部はその意義について、次のように語った。

競技そのもの、質的検討よりも、更に高度なる政治的視野に立つて考へれば感慨無量なるものがある……東亜青年の堅き結合を築き得たと云ふ感はお互ひに三國青年の胸奥に響くものがあるであらう……北支に居て見聞して居ると所謂東亜新秩序の名に於て日本から各種のことが試みられて居るが、最も堅実な青年層の提和融合の機会としてこの企ての将来の発展を祈るものである。<sup>⑧</sup>

日滿華交驪競技大会は日本の一方的勝利におわり、競技的には興味の薄い大会となった。それでも岡部はその政治的意義について、なお樂觀することができた。一九四〇年六月に日本で開かれた紀元二千六百年奉祝東亜競技大会の後になると、岡部の文章から樂觀的な言葉は消える。

現在の中華民国は政治的に何ら体育的体制を整えていない。……それを以て主催者が企図する東亜共同体、若くは共栄圏の一翼と考えなければならぬところに計画全体の根本的錯誤が伏在していたのである。多くの抽象的、観念的な東亜協同体論、共栄論も具体的問題に打突かるとき常にこれと同様の離隔に逢着せざるを得ない現状である。体育といつても所詮は政治に附いて動いて行く。体育によって政治が動く性質のものでない。共栄圏体育の確立という問題もまた従つて共栄圏政治の抽象的理念が具体化する時に<sup>⑨</sup> おいて初めて具体性をもって来る。

日滿華交驪競技大会と東亜競技大会は、東亜新秩序、共栄圏といったスローガンの虚構性を際立たせるだけの結果に終わった。本当の意味での「共栄」は、日本だけではなく、東亜全体が力をつけられないことには達成されない。岡部によれば、それにはまず「純粹の滿洲国人（日本から行った者ではない）と中国人の実力が充実に来ること」が必要であった。<sup>⑩</sup>

華北でのスポーツ事業も岡部の思いどおりには進まなかった。日中間の対立に加え、日本人同士の対立もあった。華北スポーツ界の中心機構となったのは、一九三八年七月に組織された新民会首都指導部体育会である。岡部はその事業に關して、「近來体育とかスポーツが一つの行政になつてしまつた關係から往々内容的に空虚な大会が開催され勝ちとなる。

……内容が空虚であるといふことはスポーツの会にとつては殆んど致命的のものである」と批判的であった。岡部は国策

にあわないスポーツを否定したが、国策に沿っていても内実のないスポーツは、これまた否定したのである。そもそも中華民国のスポーツが発展しないのは、岡部に言わせれば、「日本から満洲なり中国なりの体育をやりに来るものがみんな揃って体育行政官気取りで事に臨む」からであり、「大陸へ来て功を焦つてゐる日本人に特にその傾向が甚し」かつた。

いま必要とされるのは「行詰つてしまつた行政化からもう一度實際化へ、机の上から運動場へ、出直して見ること」であつた。<sup>⑤</sup>新民会首都指導部体育会の菅井浩主事は日本体育会体操学校の出身であつたが、スポーツ界では全く無名の人物であつた。菅井は日満華大会が終わつて二か月もたはずして、北京を去つた。経理面での不正が理由という。菅井の後任には同じく日本体育会体操学校出身の安田光昭が就任した。安田は、菅井ら体育工作部門の日本人たちが「日本人は優秀で、中国人は劣等だ、優秀なものが劣等なものを指導するのは当然だろう。こんな観念ですべてを律しよう」としているのを見て、激しい憤りを感じたという。安田は岡部を師と仰ぎ、岡部と同様に中江と石原から強く感化された人物である。<sup>⑥</sup>

一九四〇年一月五日、新民体育協会が華北体育協会に改組され、新民会の内部組織から華北政務委員会教育公署の監督下にある「名実共に華北に於ける体育運動競技の総合指導機関」へと拡大した。<sup>⑦</sup>同月一〇日に開催された天津・北京間の駅伝では、中盤から日本人チームと北京の中学生チームがデッドヒートを繰り広げ、勝敗はゴールの直前までもつれ込んだ。中国人のレベルが向上し、日本人と本当の意味で張り合うまでに至つたことは、岡部に大いなる感銘を与えた。<sup>⑧</sup>また一九四一年七月に青島で開催された華北都市交驛体育大会も岡部に希望を与えた。今回はじめて日本人の参加が許されたからである。岡部にとつてそれは、「吾々スポーツ人にとつては理念的に屢々口にされて来た日華の真の提携、新東亜建設への具体的な足取りを此処に見出した様な興奮さへ覚え」るものであつた。<sup>⑨</sup>しかしその欲びもつかの間に終わる。八月に開かれた華北体育協合理事会で、日本人理事は華北運動会への日本人参加を求めたが、中国人理事は「純粋に中華民国華北の体育を促進するためのものであり、ゆえに中国側だけで開催する」とこれを拒否したのである。日中間の溝は簡単に埋まるものではなかつた。

これと前後して、一九四一年の春ごろから岡部は博士論文「黄河流域地帯における漢民族体力の形態学的測定」の執筆を開始する<sup>⑧</sup>。その動機は、これまで続けてきた「日本人の体力」の研究との比較材料を求めていたこと、当時新文化建設大東亜共栄圏建設という標語のもとで日中間の文化の調整が企てられていたこと、また新民会から、河南、山西出身のクラーイーが山東出身のクラーイーに体力面で劣ることについての調査依頼を受けたこと、長く中国にいて一度は漢民族の体力測定をしたいと念願していたこと、が挙げられる。

石原莞爾の思想的影響を強く受けていた岡部は、今後の戦争が国家総力戦の形をとり、兵士だけではなく国民全体の体力の問題がますます重要になると考えていた<sup>⑨</sup>。しかし日本人の体力不足は眼を覆うばかりで、「如何なる測定においても漢民族の体力の優位はしのぎ難く」、満洲において日本人と中国人が肉体労働に従事する場合、「日本人はことごとくその職場から敗北し、生活戦線から後退」せざるを得なかった<sup>⑩</sup>。この問題は日本軍の戦力に直接影響するばかりか、日本民族の優秀性という前提を脅かす点で、中国における日本人のスポーツ事業の正当性の根幹にもかかわる重大な問題であった。さらに、この企てには、東亜新秩序や大東亜共栄圏といった政治的スローガンを文化的に実体化するという政治的目的が込められていた。「文化建設」を論じた藤井祐介は「日滿支」を中心とする東亜文化建設と南方をも含む大東亜文化建設を区別し、前者が五族協和や王道政治のイデオロギーを反映し、後者は皇民化による異民族統治を目指すものであったとする<sup>⑪</sup>。岡部が目指したのは前者であり、石原莞爾もまた同様であった。一九四〇年の東亜競技大会開催を前にして、岡部は次のように言う。「大日本体協が考へてゐるフイリツピンや、仏領印度や、インドネシアに働きかける等のことは未だ見合せたい、それは吾々の興亜といふ觀念からかなり離れてゐるし現在の興亜院の職務でないかも知れないからだ。地域的には狭くなるが大会の意義からいつてその方が明瞭であり徹底的であると思ふ<sup>⑫</sup>。」対象地域を拡大することに対するとまどいは、「日滿支」でさえなお実体化にはほど遠いと考えていた岡部にとって当然の反応であった。

一九四一年二月八日、岡部はラジオで宣戦の詔を聞く。

あゝ遂に時は来たれりわれもまた この戦ひに征かんと思ふ<sup>②</sup>

岡部はこの直前、東京で戦争の阻止を試みていたが、果たすことができなかった。岡部はこの日以後、非戦論者、敗戦論者とは交わりを絶った。<sup>③</sup>「国家が一たびその存亡さえも賭して戦争を決意して宣戦した以上、国民はそれに殉ずべきことは、国民としての当然であり最高の義務だ」からである。<sup>④</sup>それは彼の尊敬する石原莞爾をはじめ、多くの日本人がとった行動でもあった。

太平洋戦争の勃発は岡部に新たな希望を与えた。岡部が中国でスポーツ事業を推進するにあたって、常に頭を悩ましてきたのは、スポーツがもつ「外来性」、すなわちそれがつねに英米文化と結びつけられることであつた。「支那事变以前、いわゆる新中国の指導的立場にあつた中堅知識層に於ては、日本文化の全面に対して皮相な観察を下し、日本文化を以て模倣文化と見なし、ひたすら独断的、一方的である米英文化に追隨し、その徒らなる直接模倣を以て日本文化を見下し、以て得々たるの状態であつたことを筆者は長らく蔑視しながらも堪えて来た。」対英米宣戦後、一方で欧米をアジアから駆逐する戦争を行いつつ、一方で欧米的スポーツを実践することの矛盾はいっそう拡大した。しかしこれは、日本がこれからの民族の膨張発展に相応しい独自の体育を創造するまたとない機会を提供するものでもあった。

日本体育界が既に世界各国のまた世界各時代の特徴のあらゆるものを吸収し尽し咀嚼していたことは、何らの天佑であり天恵であり得たであろう。吾々は既に敵国、米、英の体育界の事情すら殆んど我が国の体育界同様に之を知り尽しているのである。即ちやがて来るべき日本民族の膨張発展に際しての誤りなき体育設計は、かかる日本体育界にして初めて可能であつたのである。……今や日本体育はそのあらゆる過去を素材として偉大、雄渾なる一大創造の試練の前に立っていることを感ずる。<sup>⑤</sup>

しかし事態は岡部のおもうようには推移しなかつた。一九四一年から一九四二年にかけて、岡部は博士論文の調査・執筆のため北京を留守にすることが多くなり、とくに一九四二年の後半はずっと日本にいた。岡部はなお華北体育協会顧問として華北のスポーツ事業に関与を続けるが、実質的な主導権は華北教育総署の重松竜覚や水川清一といった人びとに移

っていた。<sup>⑥</sup> 彼らは教育行政家であって、スポーツ界の人間ではなかった。華北では親善の名の下に場当たりの競技会が開かれていた。それは岡部が求めていたスポーツとはまったく異なるものであった。スポーツが戦争に従属するのは、両者の目的が一致する限りにおいてであった。たんに戦争に奉仕するだけのスポーツは、岡部にとってスポーツとはいえなかった。結局のところ、軍は文化工作に冷淡であり、岡部の理想は現実の前に打ちくだかれざるをえなかった。岡部は徐々にスポーツの表舞台から身を引いた。一九四四年、息子の平一はその日記にこう記した。「社会から政治活動から身を引いた父の姿、或いは雌伏十年一剣を磨く父の姿、いずれでもよろしい。父は依然岡部平太なり。」<sup>⑦</sup>

一九四五年一月、小磯国昭首相に直言すべく東京に向かう。

国護る必殺の剣は立ち向ふ世のおきてさへ踏みこむべし

岡部自身の言によれば、小磯首相との面会を果たし、参謀本部、陸軍省などでも意見を聞いてもらったようである。<sup>⑧</sup> 岡部は東京で何を訴えたのか。中江や石原の影響を受けた岡部は、日本の敗戦を予想していた。国を護るには、国が滅ぶ前に戦争を終結させねばならない、そんな思いがあったであろう。<sup>⑨</sup> 実に、一九三八年九月、一九四一年一月に続いて三度目の試みであった。ではなぜこの時期に、このような行動を取ったのか。それは一九四三年一〇月に平一が海軍航空隊を志願したことと関係があるだろう。息子を救うには、戦争の早期終結しかなかった。息子が米艦に体当たりする前に、岡部は日本の政府に体当たりを試みたのである。

めざましく体当たりせむ神風の一機の如くわれも旅往く<sup>⑩</sup>

岡部は東京から北京にもどる途中、元山航空隊にいた息子に会う。この日の出来事を平一は日記にこう記す。「今まで一度として自分の意見が通ったことはなかったのに、今日の父は、自分の説くところの悉くに耳を傾け、大賛成して呉れたのは嬉しかった、と同時に淋しい気もした。……父の情に触れるのは今日が初めて恐らくは最後かも知れない。」<sup>⑪</sup> その言葉は現実となる。十日後、平一は神風特攻隊員に選ばれる。一九四五年四月、平一は特攻隊員として出撃し、戦死する。

享年二二歳であった。

召さるれば吾が子にあらじ皇国の 空の護りの神と仰がむ<sup>22)</sup>

もはや我が子ではない、と自分に言い聞かせるその姿に、それを認めたくない父親の思いがにじみ出ている。六月、岡部は「日本のこれからの悲惨な運命を考えたり、神風特攻隊をやつてのけた伴の冥福を祈る気持ちで、二十数年間の大陸生活を引き上げ」、故郷福岡に引き揚げた。こうして岡部は失意のうちに敗戦を迎えたのである。

- ① 「美しく甦る『異境の友情』もう一度中国へ」『夕刊フクニチ』一九四七年八月二七日(厨義弘氏提供)。
- ② 『満洲日報』一九三二年一月二二日。
- ③ 『申報』一九三二年一〇月二八、二九日、十一月七、八日。
- ④ 小林龍夫、島田俊彦編『満洲事変』みすず書房、一九六四年、二七一―二七二頁。
- ⑤ 「美しく甦る『異境の友情』もう一度中国へ」。その後の歴史は彼ら二人を歴史の主流から押しつけた。西安事件で一躍国民的英雄となつた張学良とは対照的に、国民党の將軍として日中戦争、国共内戦を戦つた馮庸は、現在大陸ではほとんど忘れ去られた存在である。
- ⑥ 宮畑虎彦「岡部さん……その片鱗」(『スポーツ・勝負・人間』三四四―三四五頁)。
- ⑦ 岡部平太「『満洲体育』改造論(上)」『満洲日報』一九三四年一月一日。
- ⑧ 『満洲日報』一九三四年一月三二日、二月一日。詳細は拙稿「満洲国」の誕生と極東スポーツ界の再編」『京都大学文学部研究紀要』第四七号、二〇〇八年三月を参照。
- ⑨ 『満洲日報』一九三四年二月一日、『東京日日新聞』一九三四年三月一九日。満洲帝國政府編『満洲建国十年史』原書房、一九六九年、八九五頁。
- ⑩ 『満洲日報』一九三四年二月一三日。
- ⑪ 『満洲日報』一九三四年二月一六日。このとき大連では亜細亞民族大会準備会が開催され、満洲体育協会の要望を受けて、マニラの副総督と日本の文部大臣に「本年マニラに於て開催せらるべき極東オリムピック大会に満洲国体育協会選手を参加せしめるやう特に御斡旋あらんことを望む」との電報をうつ決議をおこなつた(『満洲日報』一九三四年二月一、二日)。
- ⑫ 『満洲建国十年史』八九六頁。
- ⑬ 「不羈の活躍をなした」岡部なしはこの「成功」はなかつただろうと、『満洲日報』一九三四年三月一〇日は指摘している。
- ⑭ 岡部平太「満洲国の極東大会参加真相」『満洲日報』一九三四年三月一三日―十五日。当時、日本は東京オリンピック誘致運動の最中であつた。
- ⑮ 『読売新聞』一九三四年七月四日、『東京朝日新聞』一九三四年七月一日。
- ⑯ 岡部平太「袂別の辞」『体育と競技』第一四卷第一一号を参照。
- ⑰ 広中一成「冀東防共自治委員会及び冀東防共自治政府の成立過程に

- ついでの一考察』『愛知大学国際問題研究所紀要』第二二八号、二〇〇六年九月。
- ⑱ 中下魁平『我が軫々人生記』大雄社、一九八五年、五三頁。
- ⑲ 岡部自筆の履歴書（厨義弘氏提供）には、「関東軍参謀部の推薦を受け就任した」と記す。
- ⑳ 岡部平太「江口次良宛て書簡」一九三六年一月二日付（厨義弘氏提供）
- ㉑ 華北における軍政工作は当初関東軍主導で行われていたが、一九三六年初頭、陸軍中央部は関東軍からその権限を奪い、支那駐屯軍の手に移した（第一次北支処理要綱）『現代史資料』日中戦争（一）『みずす書房、一九六四年、三五〇頁。』
- ㉒ 岡部平太「岡田对支文化事業部長宛て書簡」一九三七年三月二六日、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B05015738200、華北学生運動選手（岡部平太指導）昭和十二年四月（二一三画像目）。
- ㉓ JACAR: Ref. B05015738200（四一五画像目）。
- ㉔ 岡部平太「中華民国スポーツ界の将来」『読売新聞』一九三八年一月三日。
- ㉕ 岡部の扇書は彼自身によれば「私は中国側の天津市政府の教育顧問ということになっていたが、当時中国の文化機関に就任しているものは、全部日本大使館にはなく、天津軍司令部の管下に軍属として配属されていた」という（『コーチ五〇年』三四頁）。
- ㉖ 安田光昭「私の歩んだ道（一）」『日本海新聞』一九八六年四月一日。
- ㉗ 『（北京）新民報』一九三八年五月四日。はやくも一九三八年三月二四日『読売新聞』に「支那」がオリンピックに参加を希望しているとの報道がある。
- ㉘ 「ストップウォッチ」『陸上日本』第八四号、一九三八年一月。
- ㉙ 『コーチ五〇年』三一—三三頁。
- ㉚ 『スポーツ・勝負・人間』八六頁。
- ㉛ 『コーチ五〇年』三三頁。
- ㉜ 岡部平太「北京雑信」『体育と競技』第一七卷第一号、一九三八年一月、同「コーチ論」『体育科教育』昭和一九年九月号。
- ㉝ 内閣情報部と陸海軍当局の企画で、漢口攻略を前に二名の文芸家が九月から一〇月にかけて中国に送り込まれた。菊池、久米のほか、佐藤春夫、吉川英治、吉尾信子らがいた。
- ㉞ 岡部平太「北京雑信」。
- ㉟ 安田光昭「私の歩んだ道（二）」『日本海新聞』一九八六年四月二日。
- ㊱ 川合貞吉「ある革命家の回想」新人物往来社、一九七三年、二七四頁。
- ㊲ ジョシユア・A・フォーゲル著、阪谷芳直訳『中江丑吉と中国——ヒューマニストの生と学問』岩波書店、一九九二年、一七九頁。
- ㊳ 『コーチ五〇年』三一—三五頁。
- ㊴ 阪谷芳直「老北京の面影」阪谷芳直、鈴木正編『中江丑吉の人間像——兆民を継ぐもの』風媒社、一九七〇年。
- ㊵ 岡部平太「教育に思う」『久留米教育クラブ月報』第一号、一九五七年二月。
- ㊶ 岡部平太「江口次良宛て挨拶状」昭和十三年九月付（厨義弘氏提供）。
- ㊷ 同大会については拙稿「戦時下の平和の祭典…幻の東京オリンピックと極東スポーツ界」『京都大学文学部研究紀要』第四九号、二〇〇〇年三月を参照。
- ㊸ 『（北京）新民報』一九三九年三月一日、四月二日。岡部は表面には師範学院教授であったが、「軍電一本飛べば何時でも北京を離

れなければならぬ」というようになお軍部との繋がりを保っていた（岡部平太「北支の陸上陣を語る」『陸上日本』第一〇二号、一九三六年六月）。

- ④④ 『北京』新民報』一九三九年八月二日。
- ④⑤ 『満洲日日新聞』一九三九年六月三〇日。
- ④⑥ 江口次良「岡部先輩」（『スポーツ・勝負・人間』三三二―三三三頁）。
- ④⑦ 石原莞爾著、角田順編『石原莞爾資料 国防論策篇』（増補版）、原書房、一九八四年、二七六頁。
- ④⑧ 岡部平太「三国競技会所感」『満洲日日新聞』一九三九年九月九日。
- ④⑨ 「スポーツ・勝負・人間」九〇頁。
- ⑤① 岡部平太「興亜体育大会への態勢（中）」『読売新聞』一九四〇年一月二日。
- ⑤② 岡部平太「興亜体育大会への態勢（中）」、同「根本を忘れた体育」『読売新聞』一九三九年二月一九日。
- ⑤③ 安田光昭「あの人この人 私の交友録」同書刊行会、一九八〇年、一九九、二七五―二七六頁。安田を中国に呼び寄せたのは、米子中学時代の親友中下魁平であった。
- ⑤④ 「中華民国新民会第一回全体連合協議会ノ状況ニ関スル件他一件」JACAR: B02031836400（一五画像目）。
- ⑤⑤ 「スポーツ・勝負・人間」九二頁、『北京』新民報』一九四〇年一月一〇日、一一日。
- ⑤⑥ 岡部平太「華北都市体育大会を観る」『読売新聞』一九四一年七月一三日。
- ⑤⑦ 『北京』新民報』一九四一年八月一五日。
- ⑤⑧ 「スポーツ・勝負・人間」二五四―二七二頁。
- ⑤⑨ 『大阪毎日新聞』一九三八年一月二〇日。
- ⑥① 「スポーツ・勝負・人間」二六九頁。
- ⑥② 藤井祐介「統治の秘法―文化建設とは何か？」池田浩士編『大東亜共栄圏の文化建設』人文書院、二〇〇七年。
- ⑥③ 岡部平太「興亜体育大会への態勢（中）」。
- ⑥④ 「スポーツ・勝負・人間」二九五頁。
- ⑥⑤ 岡部が交わりを絶った非戦論者、敗戦論者には中江丑吉が含まれているはずだが、二人の関係は続いていた。
- ⑥⑥ 「スポーツと禪の話」三三―三四頁。
- ⑥⑦ 「スポーツ・勝負・人間」九三―九五頁。
- ⑥⑧ 趙亞夫「日偽時期華北体育概況」北京市体育文史工作委员会『北京体育文史』第一輯、一九八四年四月。
- ⑥⑨ 台北帝国大学予科士林会編『雲と波の果てに…岡部平一・原田信一遺稿追悼文集』巧芸社、一九八三年、六〇頁。
- ⑥⑩ 「スポーツ・勝負・人間」三〇五頁。当時小磯首相は終戦工作を通じて和平を模索していた。なお、帰国の途中で訪れた京城で岡部は朝鮮軍司令官の板垣征四郎大将に会っている（岡部平太「江口次良宛て書簡」一九四五年一月付（蔚義弘氏提供））。
- ⑥⑪ 岡部は上京の途中で息子平一を訪れた。平一の日記には、「支那問題の解決今日より緊急を要する時はない。白熱の議論尽くるところを知らず」とある（『雲と波の果てに』八六頁）。
- ⑥⑫ 「スポーツ・勝負・人間」三〇五頁。
- ⑥⑬ 『雲と波の果てに』九八―九九頁。
- ⑥⑭ 「スポーツ・勝負・人間」三〇四頁。

おわりに

岡部は満洲事変前後を境に自由主義スポーツから国家主義スポーツへと「転向」した。あるいは彼を「大陸浪人」——理想をもとめて大陸に渡ったものの、最後には国家に回収され、侵略の手先となった人たち——としてとらえることができるかもしれない。事実、岡部は「満蒙の経営などと云つたら今でもぞつとする程心が躍る」と語ったことがある。ただ、彼が「転向」したのは関東軍に逮捕されたからではなかった。それは、満洲事変に先立つ数年間、すなわち日仏対抗以降、中国人と交流を深めるなかですでに準備されていたのである。

岡部は当時の多くの日本人と同様に愛国者であった。そしてその感情は、満洲という地にいたことで増幅した。

岡部平太「僕は国家主義者だよ、変なことを云ふから乱暴者の様に思はれるかも知れぬが。」

大谷武一「日本人は皆国家主義者だよ。」

岡部平太「外国に行つて居る者は一層それが強くなる。」<sup>②</sup>

オリンピックを目標にして欧米諸国に追いつこうとする間、スポーツと愛国心の間に矛盾が生じることはなかった。スポーツでの活躍は国家に栄光をもたらした。ところが、中国との交流では、スポーツと愛国心の間に大きな矛盾が生じた。愛国心を出せば出すほど、中国側の排日感情を煽つたからである。岡部は満洲をまるでユートピアでもあるかのように考へ、そこで純粋なスポーツの王国を築こうとしたが、現実には、満洲は日本と中国の利害が激しくぶつかる場であった。

岡部の「転向」は世界的な潮流からとらえることも可能である。政治の世界ではファシズムが擡頭し、スポーツの世界でも同様の傾向が生じつつあった。一九三二年のロサンゼルスオリンピックにおけるイタリアの躍進、一九三六年のベルリンオリンピックにおけるドイツの勝利は、この潮流を何よりも雄弁に物語っている。では国家主義スポーツの提唱が、なぜ日本スポーツ界の中核からではなく、大陸の日本人スポーツ界から出てきたのか。岡部は極東大会満洲国参加問題に

際して、日本のスポーツ界の指導者たちは「満洲及び支那に対する認識がまるでない」ために、いつまでもユートピアを描いていられると批判した<sup>④</sup>。日本では、依然としてスポーツはその非政治性ゆえに評価され、国際社会との数少ない接点として期待されていた。しかし大陸では、スポーツは決して民族、国家間の融和をもたらしはしなかった。スポーツは政治と分かちがたく結びついていた。事実、満洲国や中華民国では国家主導のスポーツ政策が実施されていた。「日本人であること」を常に意識せざるをえなかった大陸の日本人スポーツ関係者たちが、スポーツを国家によって正当化しようとしたのは当然のことであった。

かくてスポーツは国家と結びついた。そして国家が戦争を始めると、スポーツは戦争を通じて国家に貢献しようとするが、スポーツと戦争の関係は複雑であった。その大きな原因は軍隊とスポーツの関係にあると考えられる。イギリスやアメリカの軍隊はいうまでもなく、その影響をうけたインド、フィリピン、中国等の軍隊はスポーツを有意義な娯楽として、また心身鍛練の手段として積極的に活用していた。戦争とスポーツは分かちがたく結びついていたのである。日本では武道や体操がこうした役割を担った。日本軍は大正の一時期を除いて、スポーツを積極的に取り入れようとはしなかった。さらに対英米宣戦後は敵性スポーツとして排除の対象となった。こうした状況のなかで、スポーツが戦争に貢献する一つの方法が文化工作であった。なぜなら武道は日本精神を体现するものであっても、いやむしろそれゆえに、占領地で普及させるのは難しかった。それに比べて、スポーツは日中双方で普及しており、比較的容易に実施することが可能であった。日本では「外来」性により敵視されたスポーツが、その普遍性により、占領地では利用価値を有することになったのである。戦時におけるスポーツの効用をいち早く見抜き、実践したのが岡部だった。しかし、岡部は文化工作をするために軍に投じたわけではなく、軍の特務として活動するなかで、文化工作としてのスポーツの可能性を見出したのである。岡部自身にとってそれは国家への奉仕と同義であった。そして戦争は国家の発展、すなわち「東亜新秩序」「大東亜共栄圏」を実現する手段であった。しかし軍は文化工作に熱心ではなかった。また戦争の現実には「東亜新秩序」「大東亜共栄圏」

といった理想からますます乖離していった。こうして岡部は徐々に文化工作から身を引いていった。

岡部自身は戦争に批判的であったが、岡部の活動は戦争協力以外の何ものでもなかった。

私はそれ（一九二四年のバリオリンピック）から終戦までの間、満州と中国にばかりいて、私のスポーツに対する情熱は全部中華民国の地に注ぎ込み、悔なしと自分では考えている。

これが岡部自身による大陸時代の総括である。これを中下魁平の次の言葉と比較してみよう。

僕は今迄志を大陸に立て、軍に協力し、日本の国策に沿って全力をつくした過去を、今更後悔し、否定しようとは思わない、その時その時に全力をつくして、中日提携の為に闘った。……大陸での幾十万の犠牲の上に必らず真の中日親善の花が咲くだろうことを信じている。石原〔莞爾〕さんの言われた如く、世界は必らず、資本主義や、共産主義を乗り越えた大同世界が来ることを信じている。<sup>④</sup>

中下もまた石原莞爾と中江丑吉に影響された人物である。中下の言葉はかなりの程度、岡部の心中を代弁していると考えられる。結局、彼らは日本人の立場からしか物事を見ることはできなかった。そしてこの思い込みが、華北運動会への日本人参加の要請と、中国側による要請の拒否という結果をもたらしたのである。岡部とともに華北体育協会を支えた趙亜夫は、のちに華北におけるスポーツ事業を次のように総括した。

華北の偽政権が日本侵略軍の操縦のもと、華北の各省市に対して行った八年間の体育活動は、明らかに欺瞞と統制、そして日本侵略軍への奉仕という醜悪な目的のためであった。<sup>⑤</sup>

趙亜夫の総括には、中国のその後の歴史の体験が影響を与えているし、彼自身の自己弁護の意識も働いている。それを抜きにしても、両者の認識の隔たりはなお大きいと言わねばなるまい。ただこれは岡部や中下個人の問題ではない。山口昌男が岡部とともに取り上げた小泉信三、かれのような国際人でさえ、鶴見俊輔によれば、太平洋戦争中、「彼の想像力は日本人という境界を越えることがその私用の日記においてすら」なかったという。<sup>⑥</sup>吉田裕が指摘するように、国民意識の

深いところである種の「後めたさ」を感じつつも、アジアに対する加害意識が広まりはじめるのは、岡部の死後、一九七〇年代のことであった<sup>⑦</sup>。

一九四八年、福岡で第三回国民体育大会が開催された。岡部は国体の福岡誘致とメインスタジアム建設に尽力した。メインスタジアムが建てられたのは歩兵第二四連隊の跡地で、占領軍が宿舎を建設する予定になっていた。岡部は「戦後の平和の台とするから日本に開放しろ」と米軍に交渉し、ついに競技場建設を認めさせた。厨義弘によれば、「兵どもの夢の跡を平和の台とする」という発想の底には、息子への鎮魂の願いが込められていたという<sup>⑧</sup>。

戦時中、スポーツは国外では文化工作の手段として正当化されたが、国内では戦争への貢献を通じて正当化された。よきスポーツマンはよき戦士であった。岡部の後輩、安川伊三がいうように、政府や国民のスポーツに対する態度を変えるには「スポーツ名選手の戦死」が必要であった<sup>⑨</sup>。岡部平一は父に似て万能のスポーツマンであった。平一は身を以て、よきスポーツマンはよき戦士であることを示した。それは国家主義スポーツを首唱し、若き競技者たちを前線へと後押しした岡部に待ち構えていた必然的な運命であったといえるかもしれない。

- ① 岡部平太「偶感少しばかり」『体育と競技』第六卷第一〇号、一九二七年一〇月。
- ② 加藤陸太郎「スポーツ漫談会」『体育と競技』第七卷第一一号、一九二八年一月。
- ③ 岡部平太「満洲国の極東大会参加問題」『文藝春秋』二二年五号、一九三四年五月。
- ④ 「我が軼々人生記」九三頁。
- ⑤ 趙亜夫「日偽時期華北体育概況」。
- ⑥ 鶴見俊輔「戦時期日本の精神史 一九三二—一九四五年」岩波書店、一九八二年、三三三頁。
- ⑦ 吉田裕「日本人の戦争観…戦後史のなかの変容」岩波書店、一九九五年、第六章。
- ⑧ 厨義弘「日本スポーツ界の鬼才 岡部平太研究」、岡部平太「コピー五〇年」四三—四八頁。
- ⑨ 安川伊三「体育漫語」『体育と競技』第一六卷第一〇号、一九三七年一〇月。

附記 脱稿後、岡部が一九三九年五月の一時期、「崗和平」という中国語名を使っていたことを知った。重要な事実であるので、ここに記しておく。

(京都大学文学部准教授)

nung und die damit verbundene Forderung nach politischer Teilhabe Hand in Hand mit radikalen Vorschlägen für Militärverfassung und Kriegführung“. Die Kritik der Gelehrten an der bestehenden Ordnung bildete also nichts anders als den Nährboden der Umwertung des Krieges.

Man kann die zweite Gemeinsamkeit darauf zurückführen, dass die beiden auf der aufgeklärten Geschichtsphilosophie beruhten, nach der die Menschen mit Hilfe von Vernunft und Moral, die Europa zur Zivilisation geführt hatten, weiterhin eine ideale Zukunft gestalten könnten. Überdies ist festzustellen, wie Wilhelm Janssen nachdrücklich unterstrichen hat, „dass der 18. Jahrhundert aufkommende Bellizismus als Reaktion auf den gleichzeitig entstandenen Pazifismus zu verstehen ist und dass beiden Bewegungen als auslösendes Moment der gleiche Friedensbegriff zugrunde lag: ewiger Friede unter den Menschen auf Erden“. Damit waren die beiden Gedanken sozusagen die Zwillinge, die das 18. Jahrhundert als das philosophische Jahrhundert zur Welt gebracht hat. Ausgehend von der bürgerlichen Öffentlichkeit und dem darin oft diskutierten Patriotismus boten Bellizismus und Ewiger Friede der Gesellschaft und dem Krieg neue Möglichkeiten und trugen zugleich in ausschlaggebender Weise zur Entfesselung Bellonas bei.

## War, State and Sports: Okabe Heita's "Conversion" to Nationalism

by

TAKASHIMA KO

For Japanese sportsdom, the Asian Pacific War has been remembered as a severe ordeal. Sports, especially western sports, have been thought of as victims of the war. When seen from the Chinese perspective, however, there appears a completely different image. This paper aims to examine the relation between war, the state and sports by tracing the life of Okabe Heita.

Okabe believed in the purity of sports and pursued "sport for sport's sake." For Okabe, sports were sacred and inviolable. He realized his ideal by establishing the Kingdom of Sports in Manchuria. His attitude changed gradually as he deepened his relations with the Chinese. It was nearly impossible to maintain political neutrality in Manchuria over which Japan and China contended fiercely, and sports were not immune from this political reality. Soon after the Manchurian Incident, Okabe started to advocate state-oriented, nationalistic sports. Shortly thereafter, Okabe was appointed to a secret military agency and he tried to use sports to

ease anti-Japanese sentiments among the Chinese students in Tianjin.

After the Sino-Japanese War broke out, Okabe set up a sports organization in Tianjin, and then moved to Beijing to take up a post at the National Normal University. In the area of North China occupied by Japan, quasi-official sports organizations held various sporting events as part of the occupation policies. Okabe felt that these events were too political and that sports were being exploited by the military authorities. *In the end the military paid little attention to cultural projects.* Okabe was disappointed at the gap between the ideal and the real, and faded away from sporting circles in Beijing.

In Japan, especially after the Japan Olympic Committee relinquished the right to host the 1940 Olympic games, state-oriented, nationalistic sports came to the fore, and many Japanese youths were compelled to join in the struggle on the battlefield. Thus, sports served the war effort both inside and outside of Japan. This was not, however, the result of oppression of the Japanese military, but that of a willing, active response to the war by Japanese sportsdom. Nevertheless, the relation between war and sports was complex because the Japanese military promoted martial arts and gymnastics but rejected other sports. This military's attitude toward sports produced an image of sports as a victim and concealed that of victimizer.

Technology and War:  
Digital Computer Technology from World War II to the Cold  
War Era in the United States

by

KITA Chigusa

This paper provides an overview of the relationship between computer technology and war during World War II and the early Cold War era. In doing so, it develops three themes, namely the development of civilian technologies as a result of military tensions, conflict, and strategy; the articulation of technical goals and objectives resulting from the mobilization and integration of scientific and engineering knowledge systems; and the broad relationship between federal research expenditures and technological innovation.

On this basis, the paper examines the development of digital computers, primarily in the United States. The first case is about the Electronic Numerical In-